

第六回 九州戯曲賞 最終審査過程

九州地域演劇協議会まとめ

■最終審査日時等

平成26年7月21日（祝日） 大野城まどかぴあ

■最終候補作品（5作品）

守田 慎之介（福岡県行橋市） 『ボクと彼女の、花。』
幸田 真洋（福岡県筑紫野市） 『となりの田中さん』
田中 俊亮（長崎県長崎市） 『放解←（カイホウ）』
木下 智之（福岡県福岡市） 『喜劇ドラキュラ』
大迫 旭洋（熊本県熊本市） 『東京ジャングル』

■最終審査員

岩松了、中島かずき、古城十忍、横内謙介、岡田利規

■審査結果

大賞 幸田 真洋（福岡県筑紫野市） 『となりの田中さん』
大賞 木下 智之（福岡県福岡市） 『喜劇ドラキュラ』

■授賞方針等

- ・大賞作がでた場合、原則として他の賞は出さないものとする。
- ・大賞作の水準に達する作品がない場合は、大賞なしとする。
- ・大賞作がない場合、佳作・奨励等の賞を出すことができる。

■審査過程

各作品について、審査員からの講評をおこなう

『ボクと彼女の、花。』（守田 慎之介／福岡）

主人公である「ボク」の視点を中心に、長い年月の間の花と女性関わっていた数場面の瞬間を切り取り、描いた作品。

出会いや死など、花のある瞬間という着想は好感を持てた。一つ一つのシーンが短い、それが何かの仕掛けになっておらず、また、素材としての「花」への意味付けも変わってこない、エピソードを繋げているだけでそれ以上のことが書かれていないという見方があった。

『となりの田中さん』（幸田 真洋／福岡）

入居者全員が「田中」姓のアパートを舞台に、住人同士のかかわりや、それぞれの内面を描い

た作品。2階建てアパートの4部屋を同時に見られる形で書かれている。
方言やモノを用いて、説明をせずにシーンの前後を想像させるところがすごく良い。人物同士の出会い方に関しては、もう少し集合住宅の出会い方としてリアリティのある書き方があったのではないかと、という講評があった。

『放解←（カイホウ）』（田中 俊亮／長崎）

山の頂上を舞台に、偶然居合わせた登山人同士の会話を描いた。未婚の女性、結婚を控えた女性、若くして結婚した夫婦、失恋した大学生による男女の話。

台詞のちょっとしたやりとりとか、面白さなど表面の感じが器用に書けている。山頂は特別な場所という期待をするが、山頂にいるムードを感じられなかった。台詞での説明が多いが、もっと直接的な台詞にしない努力をした方がよいという指摘があった。

『喜劇ドラキュラ』（木下 智之／福岡）

ドラキュラのモデルとなったワラキア公ヴラドの、愛と戦いと裏切りに彩られた生涯を描いた作品。

史実に忠実に作りながら、その中にオリジナルのドラマを作り上げている。ある種のプロット的な面白さがある。言葉遣いの選び方がこれでよいのか、もっとブラッシュアップができるのではないかと意見があったが、スケールの大きさと、書くことに対する衝動が評価された。

『東京ジャングル』（大迫 旭洋／熊本）

地方からある種の夢を抱いて集まってくる若者の視点で東京を描いた作品。中心となる二人の男女を四人の役者が入れ替わりながら演じられる。

登場人物の4人が次々と入れ替わる様は面白い。東京と地元のスタンスが1人1人違うという部分が描けるとより良い。一つ一つのシーンが短いことが効果的を出していないという講評が寄せられた。

（休憩）

一人あたり2票を持ち票として、1回目の投票を行う。

『となりの田中さん』5票

『喜劇ドラキュラ』5票

投票結果ならびに受賞方針等を踏まえた上でさらに議論を重ね、最終的に『となりの田中さん』の完成度の高さと『喜劇ドラキュラ』のスケール感への評価などがポイントとなり、大賞に値する作品かどうかについて、討議を重ねた。

大賞作品を一本に絞り込む議論を経たが、両作品のそれぞれ違うタイプとして高い評価が与えられた。

その結果、審査員の意見の一致を見て、『となりの田中さん』と『喜劇ドラキュラ』が大賞作品として選定された。